

自然環境保全活用調査  
その14

報告書

平成28年3月

富田林市

## 目 次

### 1. 「富田林の緑」の概要

(1) 平成20～26年度調査のまとめ	-----	1
(2) 補足現地調査	-----	9

### 2. 「生物多様性保全」について

(1) 現地調査結果のまとめ	-----	22
(2) 生物多様性保全の取組み提案	-----	23

参考資料	-----	27
------	-------	----

- 金剛団地の変遷
- 住宅地開発による里山環境の消失の事例
- 金胎寺山現地調査
- 生物多様性広報パネル

# 1. 「富田林の緑」の概要

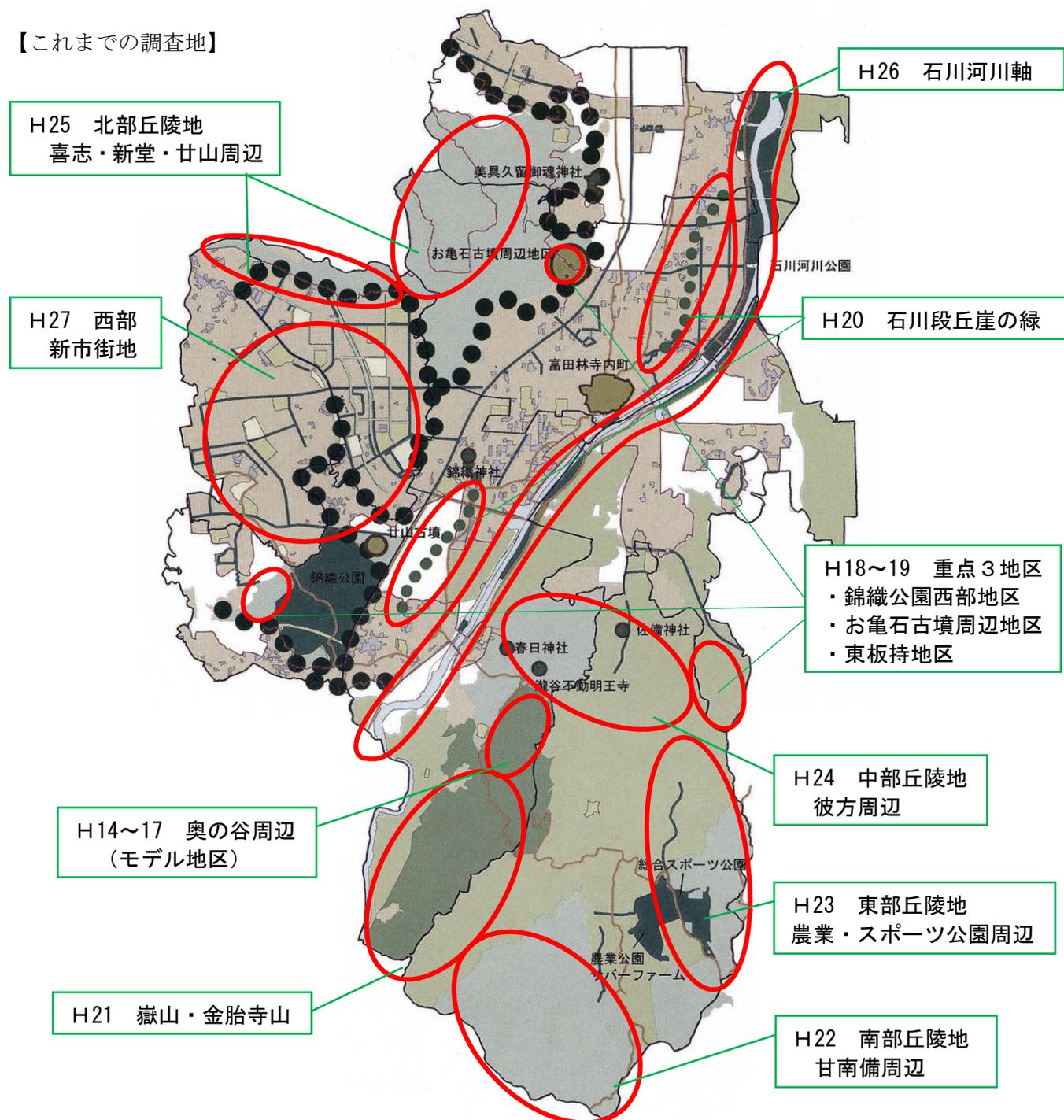
## (1) 平成20～26年度調査のまとめ

「自然環境保全活用調査」は、平成14(2002)年度より調査を開始し、平成14～19年度の6年間は「富田林市緑の基本計画」策定に向けての調査・提案として、嶽山・奥の谷周辺の里山保全プランの検討および緑の基本計画の里山保全施策への提案を行った(報告書その1～6)。

また平成19年度「緑の基本計画」策定後は、平成20～26年度まで「緑の基本計画」に位置づけられた自然環境について、富田林市内各所の里山、田畑、公園、河川などの現地を踏査し、植生概略や動植物情報、自然保全手法の検討などを検討した。

これらの調査は、「富田林の自然環境を守る市民運動協議会」の理事メンバーとともに、ボランティアによる現地踏査と、既存の市民活動を踏まえた検討を加えて毎年の報告書にまとめてきた。

### 【これまでの調査地】



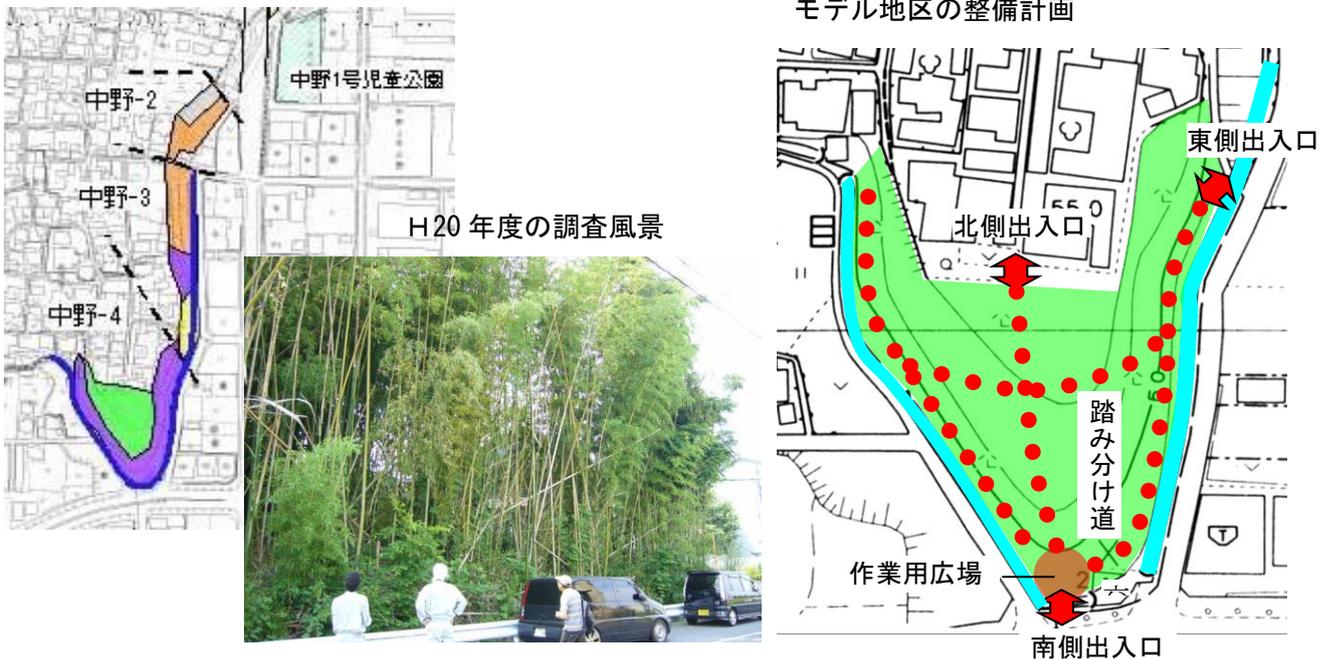
1) 平成 20 年度 「石川河岸段丘崖の緑」 の調査概略

●現地調査結果のまとめ

市域北部および南部において断続的につづく各段丘崖は、まとまった面積をもった一団の緑地か、もしくは帯状に残された小斜面かに大きく分けられ、さらにそれぞれの植生によって、緑地の位置づけや今後の保全の方向性を検討していく必要がある。

●モデル地区の保全活動を継続中

調査地のうち一箇所（中野町）をモデル地区として選定し、放置されていた現況竹林の保全活動を H22 年に開始した。現在（H27 年）までのボランティアによる作業により、枯れ竹の除去や周辺の草刈り、竹林の密度管理、散策道の整備などが完成している。



中野町竹林での保全活動の成果（H22～現在も継続中）



H21 頃 荒れ放題で真っ暗



手入れ後のようす



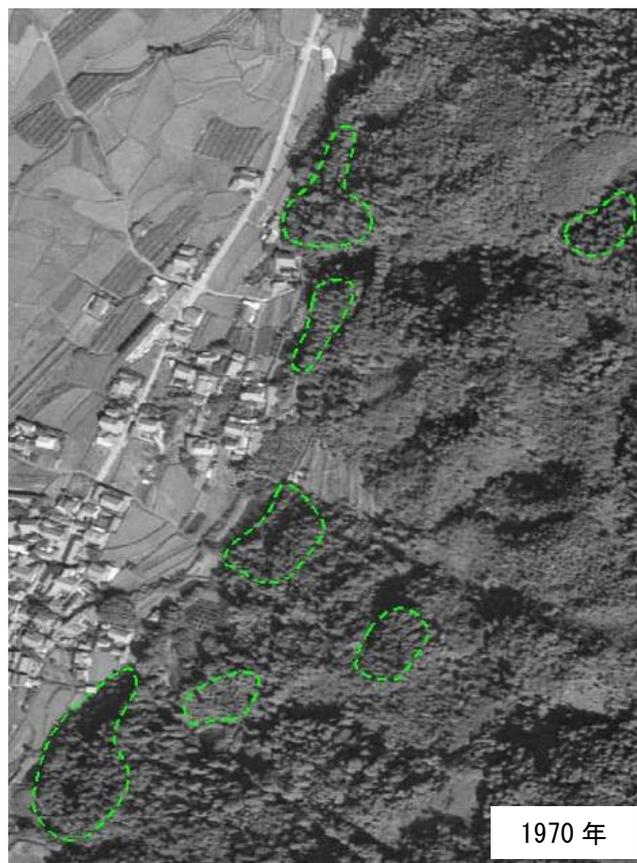
## 2) 平成 21 年度 「嶽山・金胎寺山の緑」の調査概略

### ●現地調査結果のまとめ

山城全体を踏査できる林道や歩道がないため、尾根上の一部をとおる車道と山裾部の車道、および谷の途中まで入る数本の林道沿いからの調査となったが、自然に対する人為的な影響はこれらの道沿いに発生すると考えられる。また竹林については、嬉地区および金胎寺山周辺についての 1970 年～2009 年の航空写真の比較からも、この 30～40 年間に相当に分布が広がっていることがわかった。

### ●航空写真に見る竹林の拡大状況（嬉地区）

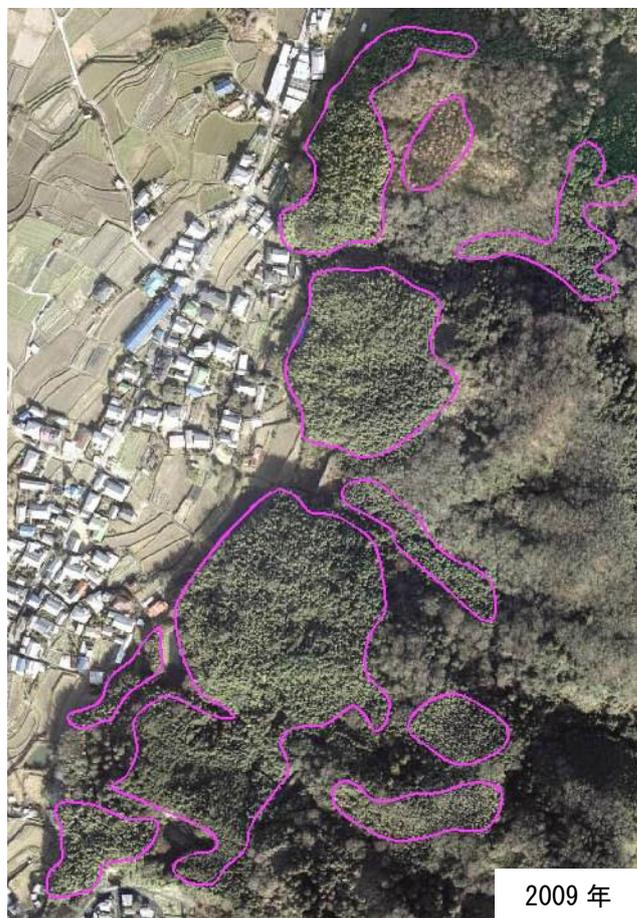
- ・1970 年：まとまった竹林はほとんど判別できず山裾に部分的に分布していたと考えられる。
- ・1983 年：1970 年には判別しがたかった竹林が、その後 13 年の間に山裾から上部斜面に向けて拡大しているようすが見られる。
- ・2009 年：竹林がさらに拡大し、1983 年には雑木林だった斜面に浸出しているようすがわかる。



1970 年



1983 年



2009 年

### 3) 平成 22 年度 「南部丘陵地の緑（金剛コロニー・楠妣庵周辺）」の調査概略

#### ●現地調査結果のまとめ

西部の金剛コロニー周辺は、コロニーの敷地内については、施設が整備されている場所以外のほとんどの面積が現況の雑木林として残されており、全体として森林環境が維持されている。しかしながら、「コロニーの森」や既存ハイキング道などの一部を除いては、藪化や常緑林化、竹林の拡大などが散見される。また、コロニーの敷地外および東部の楠妣庵周辺は、シライトソウやテイショウソウ等の植物群落が一部に見られると同時に、特に楠妣庵周辺の人工林への竹林の侵入など、手入れ不足の森林も多い。

#### ●保全すべき植物群落の確認

周辺の里山ではあまり見られない植物として、シライトソウやテイショウソウの生育が確認された。また周辺では減少しつつある自然環境に見られる植物として、コ克蘭、ショウジョウバカマなどの雑木林の植物や、ツリガネニンジン、ゲンノショウコなどの畔草地の植物を確認した。（シライトソウ、テイショウソウ、コ克蘭、ショウジョウバカマは、金剛生駒紀泉国定公園の指定植物に選ばれて、採取・損傷が禁止されている。）



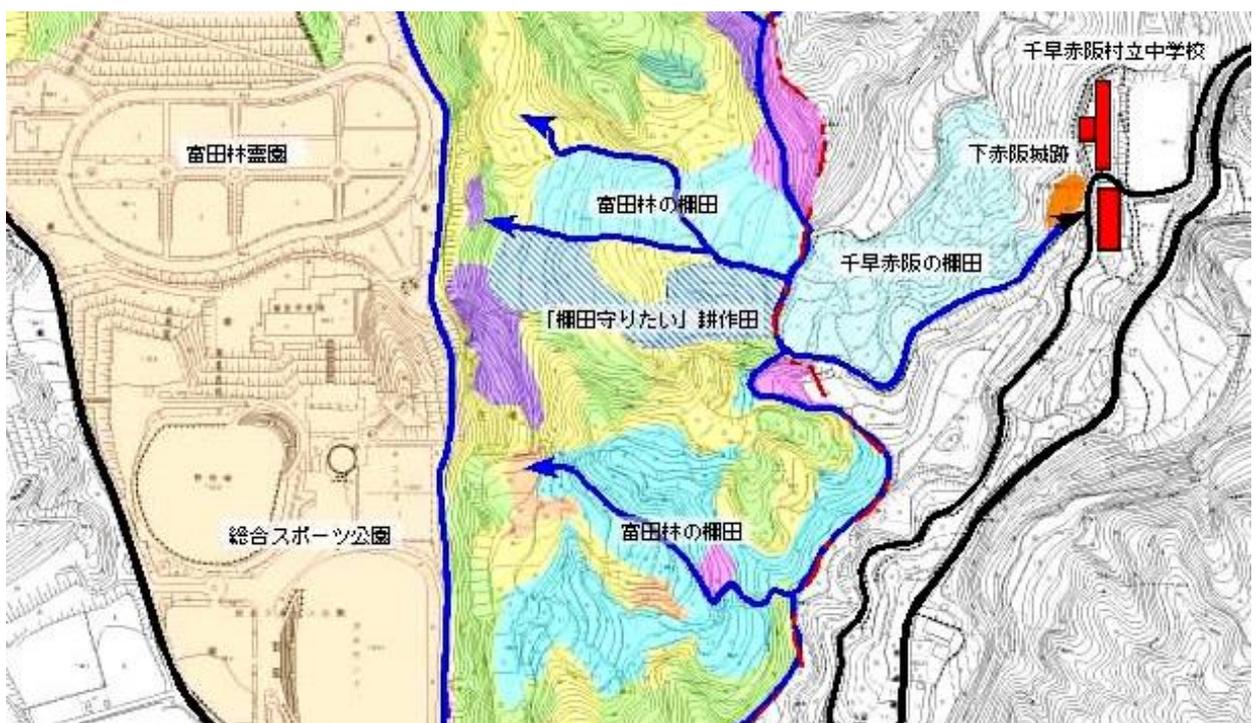
#### 4) 平成 23 年度 「東部丘陵地の緑（佐備・スポーツ公園周辺）」の調査概略

##### ●現地調査結果のまとめ

佐備周辺、南部のスポーツ公園周辺ともに、棚田、果樹園、畑地、雑木林などが連なる丘陵地でのどかな田園景観が広がっているが、管理放棄された場所も多く見られる。現在の管理者は高齢であることが多く、担い手がいなくなったあとの管理不足とさらなる放棄地の増大が心配される状況にある。

##### ●美しい棚田景観の発見

隣接する千早赤阪村の「下赤阪の棚田」は、「日本の棚田百選」に選ばれるなどよく知られているが、富田林市域にもその棚田が連続していて、非常に美しい棚田景観を形成しており、棚田周辺には他の市域では少なくなった畦畔植物も見られる。一部の棚田ではボランティアによる管理も試みられているものの、現在の高齢の耕作者（70～80歳台）がいなくなれば棚田の保全は困難な状況にある。



5) 平成 24 年度 「中部丘陵地の緑（彼方・楠風台・山手町周辺）」の調査概略

●現地調査結果のまとめ

佐備川沿いの低い丘陵地で、雑木林やスギヒノキ人工林、果樹園、竹林、農地などがモザイク状に広がっている。管理放棄された樹林や竹の侵入が広がる一方、住宅地に隣接していることからアクセスが良く比較的手入れされている箇所も見られた。春日神社のシリブカガシ林の保全のほか、住宅地に近い立地を生かした管理手法を導入しやすい地域だと言える。

<シリブカガシについて>

シリブカガシ（尻深樫、学名 *Lithocarpus glaber*）は、ブナ科マテバシイ属の常緑高木である。日本に自生するマテバシイ属 2 種（シリブカガシとマテバシイ）のうちの 1 種。和名はドングリの底が凹んでいることに由来する。常緑性の高木で、樹高は 10～15m。暖帯性であり、近畿地方以西の本州、四国、九州、沖縄の比較的海岸に近い標高 500m 以下の地域に分布し、京都府の保津峡が分布北限である。分布北限に近い近畿地方の個体数はごく少ない。日本以外に中国南東部・台湾にも分布する。（資料：Wikipedia フリー百科事典より）



●丘陵地に拡大する竹林と、林内に残る植物

他の市域と同様に随所で、マダケやモウソウチクの竹林が隣接するスギヒノキ林や雑木林、果樹園等に侵入しているようすが観察され、その拡大抑制は緊急の課題となっている。一方で、岸之本の集落周辺など、ある程度管理されて明るく、林床にさまざまな植生が見られる竹林も確認できた。市内の竹林全体を管理することは困難であるが、一部でも管理を行って、現在まだ林内に残っている多様な植生を絶やさないようにすることが望まれる。



手入れされた竹林の明るい林床に様々な植物が見られた。



ホトトギスの群落



ホウチャクソウ



ウラシマソウ



## 6) 平成 25 年度 「北部丘陵地の緑（喜志・新堂・甘山周辺）」の調査概略

### ●現地調査結果のまとめ

いずれも周囲が住宅地造成などで開発されたあとに島状に残された緑地となっている。そのため造成後の荒地や草地も多く見られるが、美具久留美魂神社の照葉樹林や甘山の畔草地、市民運動で守られた星ヶ池・辰池の水辺など良好な植生があり、その周囲にはクヌギ・コナラの雑木林が広がるなど、かつての里山の自然環境が奇跡的に残されている。しかし美具久留御魂神社の自然環境保全地域以外は特に注目されてはおらず、小規模な緑地で周辺に公園などの公共利用地もないため、保全の手立てが難しい場所である。

### ●身近に残る思いがけない自然環境

#### ○星ヶ池、辰池

1997 年、護岸整備工事に対して地域住民から自然環境保全の要望が寄せられ、当時の行政担当者（大阪府、富田林市）や地元水利組合との話し合いの結果、一部護岸の現況維持や表土保全、ヨシの移植など自然に配慮した整備が実施された。



#### ○桃花塾敷地内の里山林

桃花塾が助成対象となっている大阪さともり事業は、平成 25～27 年度の 3 ヶ年で雑木林や人工林、竹林の整備および活動を実施するもので、桃花塾の里山整備は当面、本事業で進められる。施設関係者はもとより、連携する NPO や大阪芸大の関係者の意欲も高く、住宅内に取り残された里山林保全の取り組みとして大いに期待される。



#### ○丘陵開発地に残存する緑地

狭い面積の中ではあるが、雑木林や人工林、ため池、畔草地などがモザイク状になっており、開発前の自然環境が残されている。谷部が水田や畑、果樹園、造園用の植木圃場などに利用されていること、また道沿いはニュータウンの緑地になっていることから、周辺の草刈り管理が比較的よく行われているようで、意外にも、畔にはワレモコウやツリガネニンジン、道沿いの草地にはチガヤやノアザミなどが良好に生育している。



ノアザミ



ワレモコウ



ツリガネニンジン



チガヤ

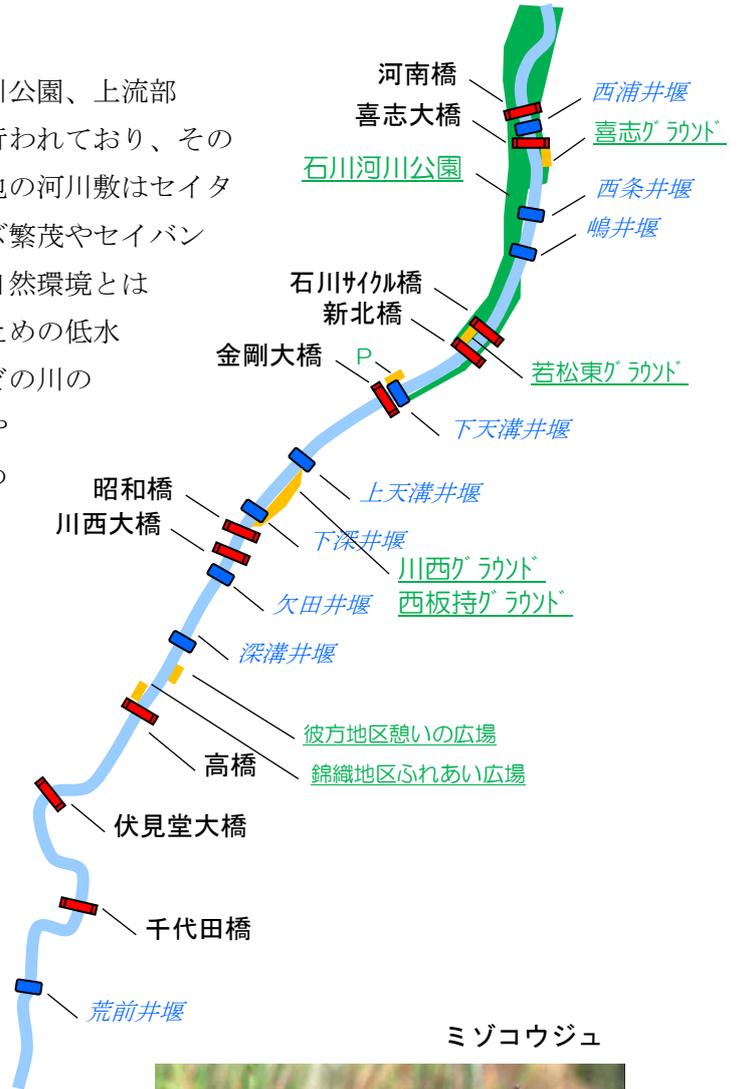
7) 平成 26 年度 「石川河川軸の緑」の調査概略

●現地調査結果のまとめ

富田林市域の石川河川敷は、下流部には石川河川公園、上流部にはグラウンドや広場が整備されて面的な利用が行われており、その多くは自然環境が人為的に改変されている。その他の河川敷はセイタカヨシなどの高茎草が多く見られるものの、クズ繁茂やセイバンモロコシなどの外来草が侵入し、本来の河川の自然環境とは異なった状況になっている。これは、洪水防止のための低水護岸整備や河道固定によって増水やフラッシュなどの川の営みが少なくなったこと、また取水のための井堰やラバーダムなどによって止水的な環境が増えたためと考えられる。一方、河南橋下流の石川河川公園「自然ゾーン」は、約 20 年前の市民運動によって低水護岸が整備されずに水辺の自然環境が残され、現在も自然を守る活動が継続されており、富田林市域の自然として重要な箇所となっている。

●希少な動植物の保護

自然ゾーンには、希少植物ミゾコウジュ※の自生地があり、約 20 年前から市民による保全活動が行われている。また、河川敷に広がるオギ草地では、最近に作られたカヤネズミ※の巣が見られた。(※いずれも大阪府レッドデータブック「準絶滅危惧種」)しかしながら、詳細な調査等はされておらず、今後の保護施策が求められている。



ミゾコウジュ



カヤネズミの巣と子ども



オギ草地



ミゾコウジュ自生地の保全作業

## (2) H27年度 補足現地調査 ～新市街地（金剛ニュータウン）の緑～

### ① 緑の基本計画における位置づけ

今年度は、これまでに調査を行っていない市西部の新市街地（金剛ニュータウン）について現地踏査を行った。平成19年度に策定された「富田林市緑の基本計画」では、新市街地の緑は、緑の将来像で「宅地の緑」「身近な公園緑地」に区分され、富田林市の暮らしを彩る緑として位置づけられている。

「富田林市緑の基本計画」より抜粋・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

### ■緑の評価と課題の整理

#### ○ 街路樹・緑道

新市街地をはじめとする歩道の街路樹や緑道の植栽は、都市の生活空間における身近な緑として環境保全や景観形成の面で貴重な緑となります。富田林市においてはグリーン・ハーモニー・プラン等によってこれまで緑化が推進されてきましたが、相当の年月の経過とともにそれらの樹木の維持・更新の必要性が高まっています。

#### ○ 住宅や施設周りの緑化推進

市街地においては、総じて緑の量が少なく、人工的で潤いのない環境となりがちです。そこで、道路や学校等の主要公共施設、工場等の大規模民間の事業所や個人の住宅地等においては、緑化を推進することにより、良好な景観や快適な生活環境の形成を目指した取り組みが必要です。（後略）

### ■ゾーン別の緑の基本方針（市街地ゾーン）

新市街地は、金剛や金剛東等のニュータウンの区域にあたり、道路や公園・緑地をはじめとする公共公益施設が計画的に整備され、住宅地においては緑地協定地区をはじめとして宅地内に緑が形成され、比較的良好な環境となっています。市街地の外縁部には丘陵や段丘崖の斜面林が残されていることから、今後は身近な自然地としてそれらの保全・活用を図っていきます。また、市街地ゾーンにおいては、民有地や公共施設における緑化の推進を図り、緑豊かな市街地景観を形成させます。

### ■レクリエーション系統の緑の配置方針

#### ○ 身近な公園・緑地

住区基幹公園等の市街地内の公園・緑地は、人々にとって身近な公園であり、日常的なレクリエーションの場となります。

### ■防災系統の緑の配置方針

#### ○ 街路樹・緑道

火災時の延焼防止や震災時の建物倒壊の抑制、安全な避難空間の確保等の機能を有する緑となります。

### ■景観構成系統の配置方針

市街地周辺の公園・緑地は、人々にとって身近な緑の景観シンボルとして、日常的な景観に潤いを与える要素となります。

街路樹・緑道の緑は、幹線道路を中心として、市街地の中で連続的に形成される緑の軸となり、都市景観に潤いを与える要素となります。

景観資源に乏しい市街地においては、公共施設や民有地における緑化により形成される緑が、まちの景観に潤いを与え、生活空間を彩る重要な要素となります。

## ■富田林市の暮らしの質を高める緑の創出と育成

### ○身近な公園・緑地の整備と維持・管理

身近な公園・緑地については、既成市街地内等の公園・緑地が不足している地区において計画的な整備を推進します。既存の公園・緑地に関しては、公園等愛護会等を積極的に活用しながら、樹木や公園施設等の点検や清掃活動、花壇整備等、民間や市民の活力を生かしながら身近な公園を活動の舞台とした緑のまちづくりを進めます。

### ○学校グラウンド・公共施設の広場の活用

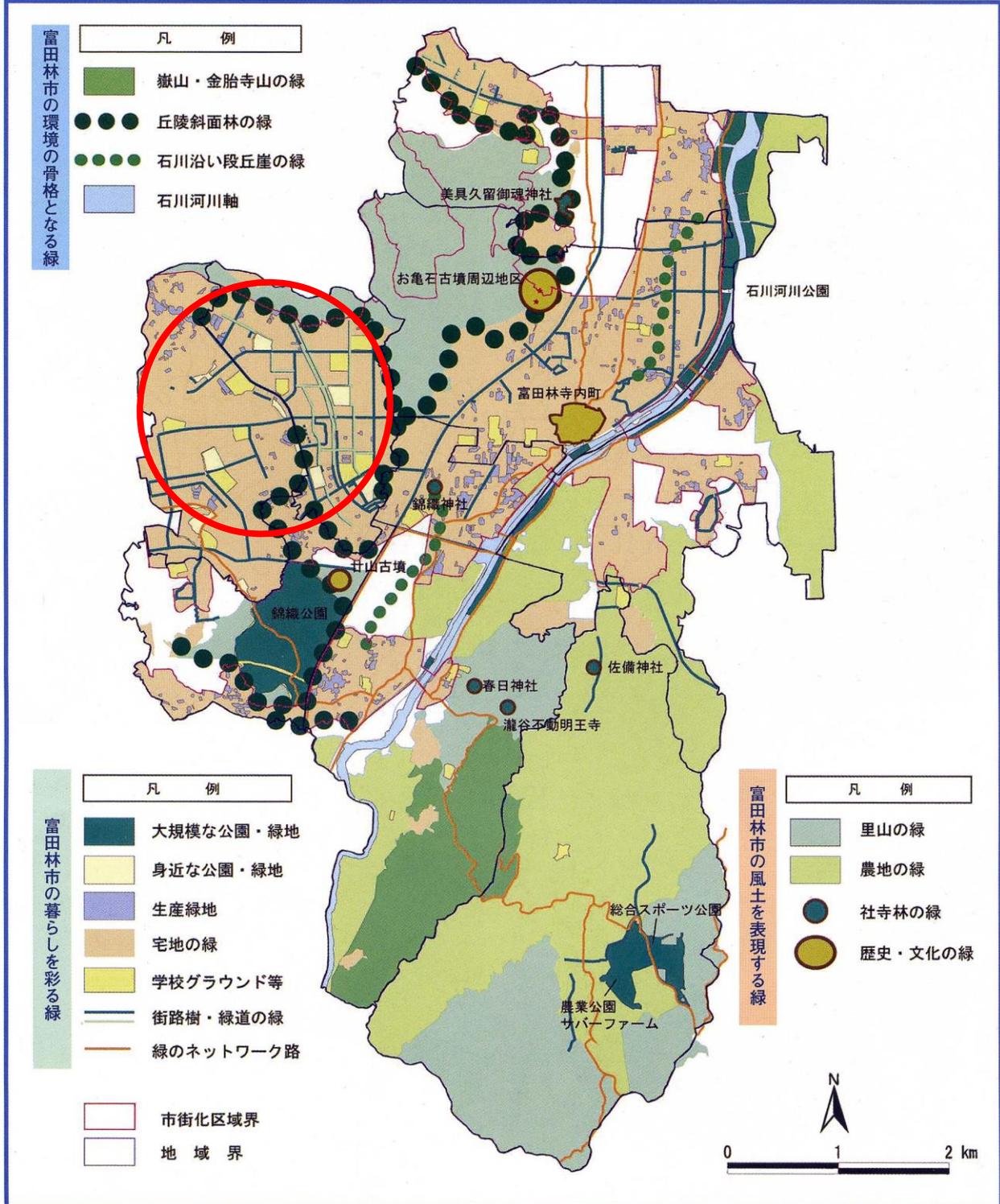
災害時の避難地に指定されている学校のグラウンドや公共施設の広場については、そこまでのアプローチも含めて、十分な空地機能を確保するとともに、緑豊かな快適空間を形成させます。また、学校ビオトープの整備等、教育部局の協力の下にこれらの空間のエコアップや環境学習の場づくりを積極的に促進します。

### ○街路樹・緑道の育成・管理

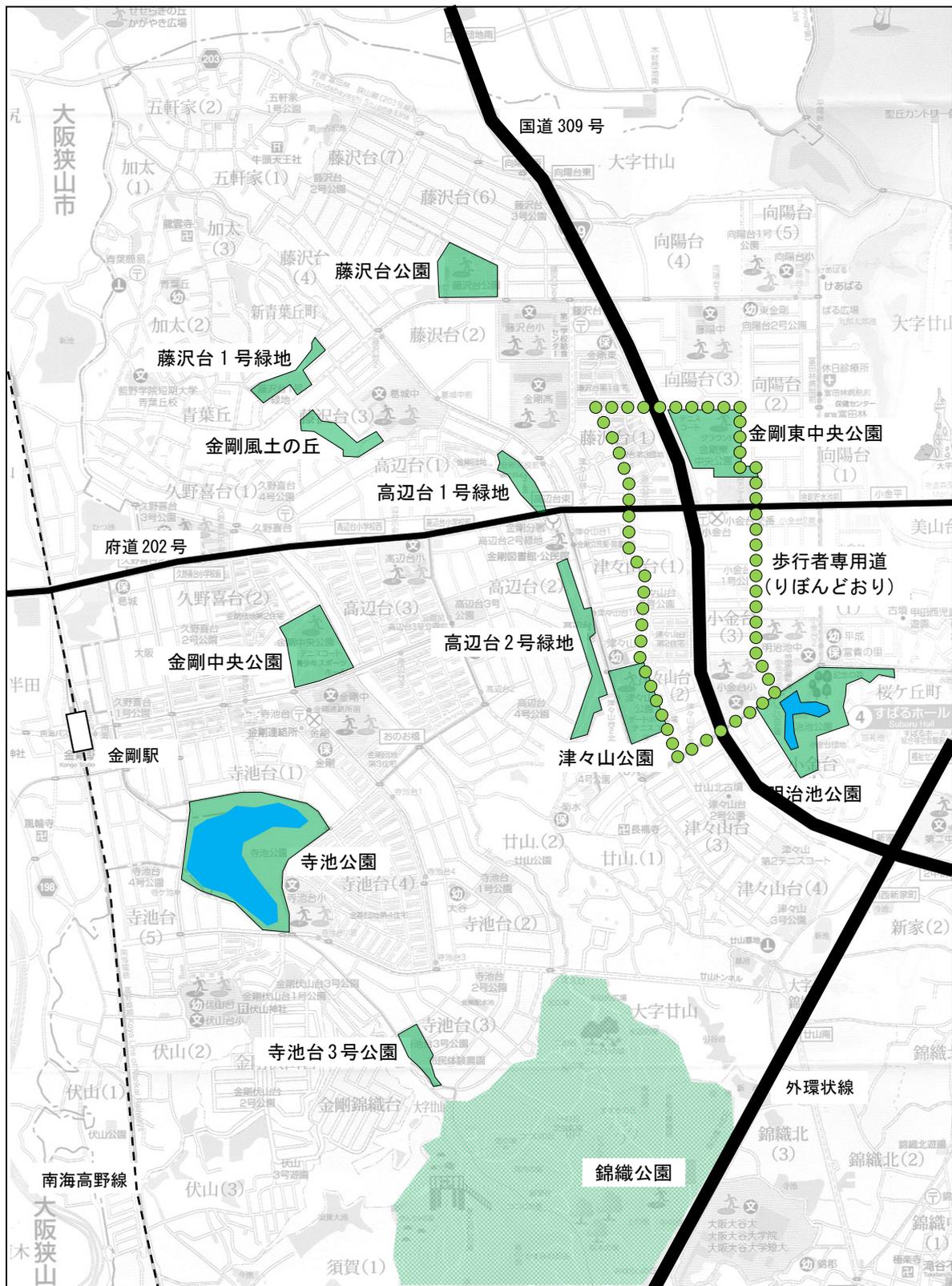
新市街地をはじめとする歩道の街路樹や緑道の植栽は、都市の生活空間における身近な緑として環境保全や景観形成の面で貴重な緑となります。富田林市においてはグリーン・ハーモニー・プラン等によってこれまで緑化が推進されてきましたが、それらの樹木の維持・更新の必要性が高まっています。今後は、グリーンマネジメント(※)の視点をふまえ、危険木診断等の調査や市民の街路樹に対する意向調査を実施し、街路樹等の更新・管理計画を作成していくものとします。そのうえで、市民の理解と協力を得ながら住民参加の取り組みも含めて街路樹の適切な維持・管理を推進します。

<富田林市緑の基本計画「緑の将来像図」>

※宅地の緑は、富田林市の“暮らしを彩る緑”に位置づけられている。



② 調査対象地の位置



<現地調査日> H27年10月10日、11月11日、H28年2月15日

<航空写真>



### ③ 緑地の状況

#### ●明治池公園（地区公園 面積 49,000 ㎡）

ため池（明治池、青池）の周辺が公園となっており、広場や記念の森、樹林の中の遊歩道などが整備されている。池の奥や公園東側には管理されない現況樹林が残っている。



○公園北側の入口付近から見た明治池。正面の小山は現況の樹林が残されている。



○池の護岸はコンクリートで安全柵がある。



○樹林内をめぐる遊歩道



○二つの池の間にヨシ等が繁茂している。



○公園東側に残る現況樹林

●津々山台公園（近隣公園 面積 20,000 m<sup>2</sup>）

グラウンド、芝生広場、テニスコート、遊具コーナーなどが整備された公園で、日常的なレクリエーションの場として親しまれている。現況の樹林は残っていない。



○地震等の際の一時避難地に指定されている。



○公園内のテニスコート



○広々としたグラウンド



○遊具コーナー



○芝生広場の周囲には種々の樹木が植栽され、春には桜の花見でもにぎわう。



●高辺台2号緑地（緑地 面積 20,606 m<sup>2</sup>）

津々山台公園と道路をはさんで西側から金剛公民館まで細長く連続する緑地で、遊歩道が整備されている。一部に造成時の現況と思われる地形やクヌギ林が見られる。



○遊歩道の周辺には、灌木の植え込みや花壇などが配置されている。



○緑地東側斜面の常緑樹（クロマツ等）植栽地



○現況地形のおもかげを残す起伏とコナラ林



○金剛公民館に隣接する園地。スイレンの繁茂する池や桜古木の植栽地がある。



●高辺台1号緑地（緑地 面積 8,611 m<sup>2</sup>）

金剛公民館の北側に立地する緑地で、常緑樹と落葉樹の疎林となっている。



○南側から見た緑地



○現況地形のおもかげを残す起伏と疎林

●藤沢台1号緑地（緑地 面積 10,144 m<sup>2</sup>）

北側は青葉丘町につづく緑地で、芝生広場の背後に現況林の丘、急斜面の下に調整池がある。



○芝生の奥の現況林には人が立ち入れない。



○急斜面を下ったところにある調整池



○道路に沿って残る現況林はコナラなどの雑木林となっているが、あまり大木は見られない。



●藤沢台公園（近隣公園 面積 20,000 m<sup>2</sup>）

藤沢台小学校の北西に位置する公園で、芝生広場の周囲には美しいケヤキの疎林がある。西側には現況地形と思われる小高い丘があり、斜面はコナラ林となっている。



○公園の入口から見た樹林



○黄葉が美しいケヤキの疎林



○丘の上にはあずま屋があり展望がひらける。



○子どもが遊ぶためか林床は裸地化している。

●金剛東中央公園（近隣公園 面積 30,000 m<sup>2</sup>）

広いグラウンドやテニスコートがあり、周囲の樹林地は木々が大きく育って多少暗い印象をうける。



○常緑樹の向こうに広がるテニスコート



○大きく樹冠をひろげる紅葉の大木

●金剛風土の丘（山林 面積 13,184 m<sup>2</sup>）

平成 13 年に市に寄贈された山林で、金剛ニュータウンのもっとも標高の高い場所に位置する。寄贈前に園路や広場が整備され除草等の管理もされているが、一般利用には開放されていない。



○住宅地に隣接する入口部



○頂上に設置されている記念碑



○尾根上は開けた空間となっており、金剛ニュータウンや大阪市街地まで展望できる。



○敷地内に残る現況の雑木林とヒノキ林。園路も整備されている。



【金剛風土の丘でみられた植物】

アカマツ、アカメガシワ、アケビ、イヌツゲ、イヌビワ、イロハモミジ、ウバメガシ、ウメモドキ、カキノキ、クスノキ、クロガネモチ、クロバイ、クロマツ、コウヤボウキ、コナラ、サクラ sp、サツキ、サルトリイバラ、サンゴジュ、シャシャンボ、シラカシ、スギ、スダジイ、トウネズミモチ、ナツハゼ、ナツフジ、ナナミノキ、ナンテン、ネジキ、ネズミサシ、ハギ sp、ハゼノキ、ヒサカキ、ヒノキ、ピラカンサス、ミツバアケビ、モチツツジ、ヤシャブシ、ヤマウルシ、ヤマモモ

●寺池公園（地区公園 面積 37,528 m<sup>2</sup>）

南海金剛駅南東の公園で、ため池（24,000 m<sup>2</sup>）の周囲数箇所に広場や園路が整備されている。東側にまとまった現況林が残されており、コナラ高木の下層はヒサカキなどの常緑灌木が育っている。



○公園の看板



○北側から見た寺ヶ池と樹林地



○東側園地の園路沿いにひろがる雑木林



○寺ヶ池は近世初期に築造された（沿革より）。

●金剛中央公園（近隣公園 面積 27,991 m<sup>2</sup>）

グラウンドやプール、スポーツホールのある公園で、近年は金剛地区活性化の取り組みとして「金剛バル」が開催されている。



○ケヤキやカシが大木に育っている。



○11月の金剛バルのようす（市HPより）

●寺池台3号公園（近隣 面積 11,393 m<sup>2</sup>）

錦織公園の北西にある公園で、小高い丘に現況林が残っている。地域住民による「金剛の自然環境を育てる会」が公園周辺の環境保全活動に取り組んでいる。



○入口階段の上は広場になっている。



○現況の雑木林が残る園路沿い。



○「金剛の自然環境を守り育てる会」が助成金の支援で整備した緑地



○公園南西に隣接する農地。オオタカの飛来地として環境保全の取り組みが行われている。



○住宅地開発によって失われた自然を少しでも残すために作られたビオトープ。



## 2. 「生物多様性保全」について

### (1) 現地調査結果のまとめ

金剛・金剛東ニュータウンは、昭和 38 年に金剛団地の造成が始まって以降、平成元年頃までに高辺台、久野喜台、寺池台、藤沢台、小金台、向陽台などの新市街地が形成された。日本住宅公団（現UR都市機構）により道路や公園緑地、公共施設等が計画的に整備されてきたことから、区域の都市公園の整備率は市内でもっとも高くなっている。面積が広く施設も整備された地区公園、近隣公園や緑地も充実している。

- ・地区公園 2ヶ所：寺池公園、明治池公園
- ・近隣公園 5ヶ所：金剛中央公園、寺池台 3 号公園、金剛東中央公園、藤沢台公園、津々山台公園
- ・緑地 4ヶ所：藤沢台 1 号緑地、高辺台 1 号緑地、高辺台 2 号緑地、小金台緑地

一方、宅地造成が始まる以前は、周辺はアカマツやコナラの雑木林や農地のひろがる里山であったと考えられ、現在も公園緑地の一部や住宅地内の斜面、金剛風土の丘などに小面積の現況林が残されている。それら現況林の多くは放置されて数十年が経ってアカマツは早くに消失し、コナラは大径木化して林内にはヒサカキ等の常緑樹が育ってヤブになっている。幸いなことに現地調査した範囲では竹林の侵入は見られず、逆に公園利用されている箇所では、除草管理と踏圧で林床植生が見られないところも多く見られた。

市内の他地域とくらべて緑の「量」は確保されているが、開発前の自然環境はほとんど残されておらず、自然環境や生物多様性の視点からはけっして良好とは言えない。今後は緑の「質」をいかに向上させていくかが課題と言える。

#### 【金剛ニュータウンの沿革】

- 昭和 38 年 金剛団地の起工式
- 昭和 42 年 高辺台、久野喜台、寺池台の分譲開始
- 昭和 43 年 高辺台小学校、金剛中学校が開校、市役所金剛連絡所が開設
- 昭和 44 年 久野喜台小学校が開校
- 昭和 45 年 寺池台小学校が開校、金剛市民グラウンド・プール完成
- 昭和 52 年 伏山台小学校が開校、富田林病院が完成、狭山池富田林線が開通
- 昭和 55 年 藤沢台小学校、葛城中学校が開校
- 昭和 56 年 金剛東団地の分譲開始
- 昭和 57 年 金剛 1 号近隣公園（金剛中央グラウンド）で第 31 回大阪府植樹祭を開催
- 昭和 58 年 金剛公民館・図書館が完成
- 昭和 61 年 国道 309 号が開通
- 昭和 62 年 明治池公園が開園
- 平成元年 小金台小学校が開校、甲田東西線が開通
- 平成 2 年 向陽台小学校、明治池中学校が開校
- 平成 3 年 すばるホールが完成
- 平成 6 年 総合スポーツ公園完成
- 平成 8 年 ケアセンター（けあぱる）が完成



（金剛団地自治会結成 30 周年記念誌「金剛はふるさと」より）

## (2) 生物多様性保全の取組み提案

平成 20～26 年度に行った「富田林の緑」の調査では、市内のさまざまな自然環境の概況把握と保全手法の提案を行ってきたが、今後はさらに、近年重要となっている「生物多様性保全」の視点から、調査結果の活用や新たな取組みを検討する必要があるが生じている。そこで、以下に「生物多様性保全」の意義の確認および次年度以降の取組みについて提案を行う。

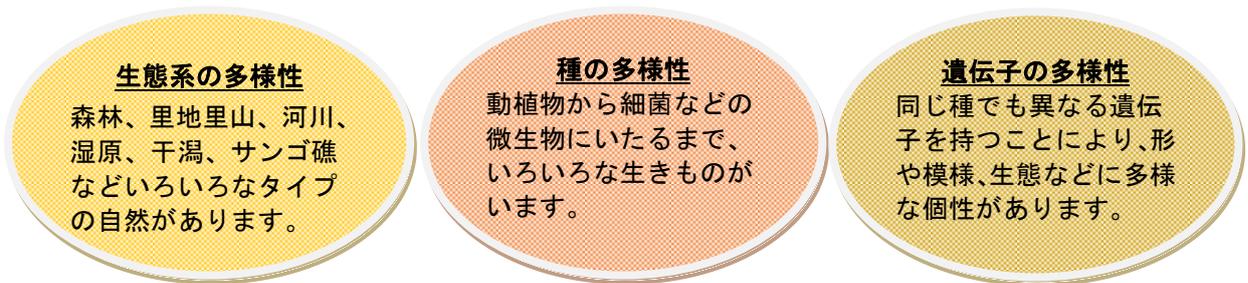
### 1) 「生物多様性」とは

環境省のホームページより抜粋・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

#### ●生物多様性とは

生きものたちの豊かな個性とつながりのこと。地球上の生きものは 40 億年という長い歴史の中で、さまざまな環境に適応して進化し、3,000 万種ともいわれる多様な生きものが生まれました。これらの生命は一つひとつに個性があり、全て直接に、間接的に支えあって生きています。生物多様性条約では、生態系の多様性・種の多様性・遺伝子の多様性という 3 つのレベルで多様性があるとしています。

#### ●3 つのレベルの多様性



#### ●生物多様性のめぐみ

私たちの暮らしは、食料や水、気候の安定など、多様な生物が関わりあう生態系からの恵み（生態系サービス）によって支えられています。

**生きものがうみだす大気と水（基盤サービス）**

- ・酸素の供給
- ・気温、湿度の調節
- ・水や栄養塩の循環
- ・豊かな土壌

植物が酸素を生み、森林が水循環のバランスを整えるなど、生命の生存基盤は多くの生きものの営みによって支えられています。

**暮らしの基礎（供給サービス）**

- ・食べ物
- ・木材
- ・医薬品
- ・品種改良
- ・バイオミミクリー（生物模倣）

毎日の食卓を彩る野菜などの食料はもちろん、新聞や本などの紙製品や医療品など、生きもののがん遺伝的な情報、機能や形態も私たちの生活の中で利用されています。

**文化の多様性を支える（文化的サービス）**

- ・地域性豊かな文化
- ・自然と共生してきた知恵と伝統

海に囲まれ南北に長い国土と季節の変化に富む日本では、地域ごとに異なる自然と一体になって地域色豊かな伝統文化が育まれてきました。

**自然に守られる私たちの暮らし（調整サービス）**

- ・マングローブやサンゴ礁による津波の軽減
- ・山地災害、土壌流出の軽減

豊かな森林や河川の保全是安全な水の確保や、山地災害の軽減、土壌流出防止など、私たちが安心して暮らせる環境の確保につながります。

## ●生物多様性に迫る危機

日本の生物多様性は4つの危機にさらされています。過去にも自然現象などの影響により大量絶滅が起きていますが、現在は第6の大量絶滅と呼ばれています。人間活動による影響が主な要因で、地球上の種の絶滅のスピードは自然状態の約100~1,000倍にも達し、たくさんの生きものたちが危機に瀕しています。

日本の生物多様性の危機



### 第1の危機

#### 開発や乱獲による種の減少・絶滅、生息・生育地の減少

鑑賞や商業利用のための乱獲・過剰な採取や埋め立てなどの開発によって生息環境を悪化・破壊するなど、人間活動が自然に与える影響は多大です。



### 第2の危機

#### 里地里山などの手入れ不足による自然の質の低下

二次林や採草場が利用されなくなったことで生態系のバランスが崩れ、里地里山の動植物が絶滅の危機にさらされています。また、シカやイノシシなどの個体数増加も地域の生態系に大きな影響を与えています。



### 第3の危機

#### 外来種などの持ち込みによる生態系のかく乱

外来種が在来種を捕食したり、生息場所を奪ったり、交雑して遺伝的な攪乱をもたらしたりしています。また、化学物質の中には動植物への毒性をもつものがあり、それらが生態系に影響を与えています。



### 第4の危機

#### 地球環境の変化による危機

地球温暖化は国境を越えた大きな課題です。平均気温が1.5~2.5度上がると、氷が溶け出す時期が早まったり、高山帯が縮小されたり、海面温度が上昇したりすることによって、動植物の20~30%は絶滅のリスクが高まるといわれています。

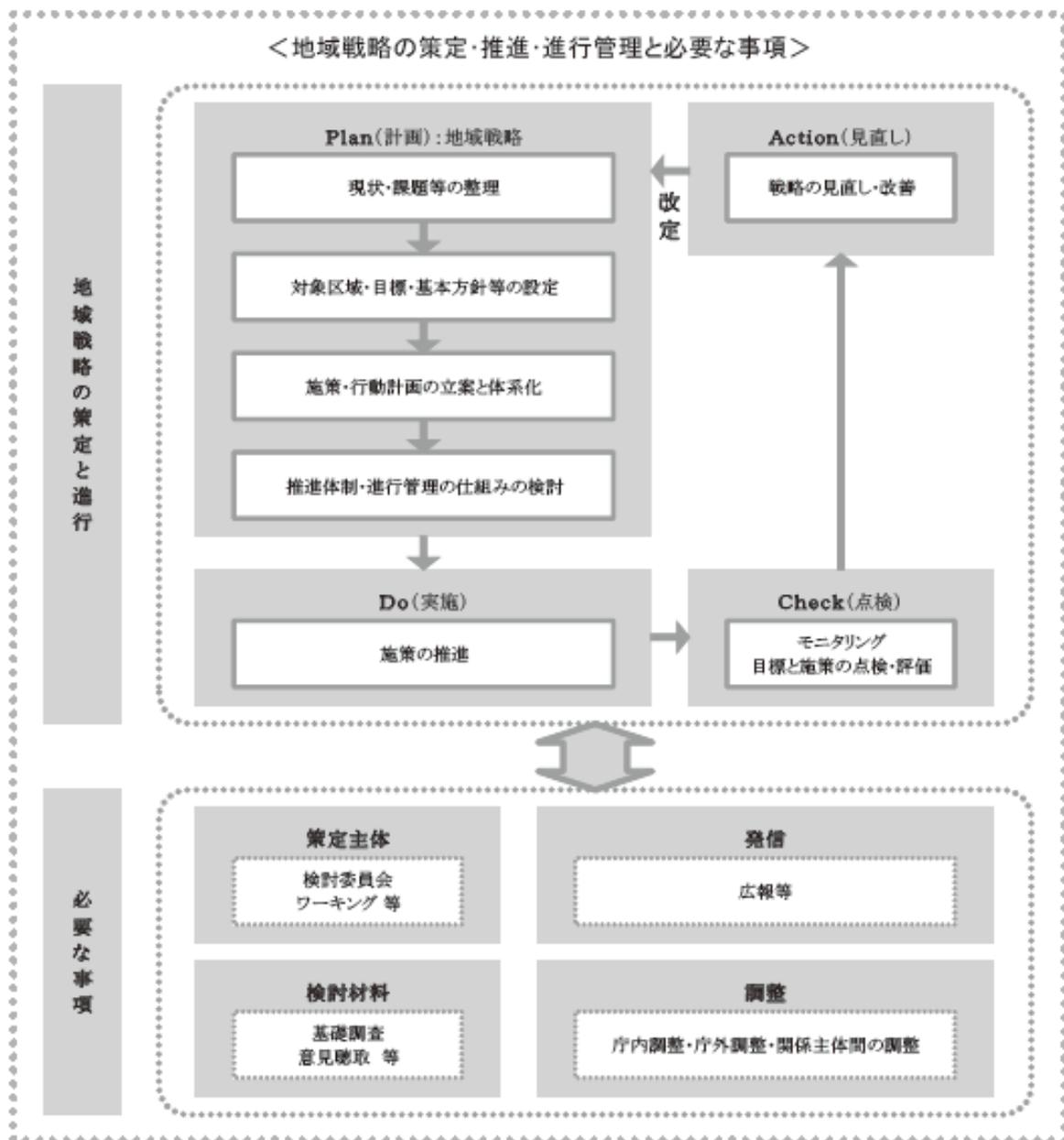
上記の4つの危機を受けて、日本の野生動植物の約3割が絶滅の危機に瀕しています（絶滅危惧種 3,597種）。「いのち」と「暮らし」を支える生物多様性を私たちは、自らの手で危機的な状況に陥らせています。すべてのかけがえのないいのちを守り、その恵みを受け続けていけるように、今、行動することが必要なのです。

## 2) 今後の取組み

H20年に策定された「生物多様性基本法」では、都道府県及び市町村は生物多様性地域戦略の策定に努めることとされており、その策定にあたっては、本調査の拠りどころとなる「緑の基本計画」などと連携を密にして、実効性のある戦略とすることが求められている。

また、策定のための必要事項のひとつとして、「地域の生物多様性の現状を把握することが重要」で「そのためには生物相調査をはじめとする様々なデータを必要とする」とされている。その基礎情報の収集にあたっては、「自然環境に関する情報が足りていない場合でも、哺乳類や鳥類、植物など分野を限ると既に目録が整備されていたり、地元の愛好家などが多くの知見を有していることもあります。(中略)既存の情報の中にも活用できるものがないか検討してみることも必要でしょう。」とされている(「生物多様性地域戦略策定の手引き改訂版(H26)」より)。

今後の調査では、これまでに収集した「富田林の緑」の情報をもとに、さらに「生物多様性保全」の視点を加えて、地域戦略策定の「現状・課題等の整理」に活用できるデータを用意することが求められる。



そこで、次年度以降の調査の方向として以下のように提案する。

●生物多様性保全のための基礎調査（H28～）

毎年のテーマや分野を設定し、これまでの基礎情報をベースとして現地調査および既存資料の文献調査、地域やNPOへのヒアリング調査などを行う。

H28年度	富田林の“植物”	: 植生の概要、希少植物、外来草本など
H29年度	富田林の“昆虫”	: 昆虫相の概要、希少昆虫、外来昆虫など
H30年度	富田林の“動物”	: 動物相の概要、希少動物、外来動物など
H31年度	富田林の“鳥類”	: 鳥類の概要、希少鳥類、外来の鳥など
H32年度	富田林の“水生生物”	: 魚類、両生類の概要、希少種、外来種など

●上記の調査結果のまとめ、補足調査（H33～）

テーマ・分野別の調査結果をまとめて生物多様性のホットスポット※や重要エリアを抽出し、市域全体の現状分析と課題の整理、生物多様性保全戦略策定に向けた提案を行う。

H33年度	富田林の“生物多様性ホットスポット”、重要なエリアの抽出など
H34年度	現状分析と課題の整理、生物多様性保全戦略に向けた提案など

※多様な生物が生息しているにもかかわらず、絶滅に瀕した種も多い生物多様性重要地域

また、これまでに把握している既存情報としては以下のようなものがある。

- ・これまでの「自然環境保全活用調査」報告書
- ・奥の谷のモニタリング1000調査（植物、昆虫）
- ・石川河川公園の希少種についての資料（ミゾコウジュ、カヤネズミ、カワバタモロコ等）
- ・大阪府や富田林市、大阪自然環境保全協会等のデータ、資料
- ・「富田林の自然」の掲載情報
 

宇奈田川の昨今（宇奈田川保護委員会会長 辻守敏）	No.5	2007年3月
錦織公園生きもの歳時記（浅野晴也）	No.6	2008年3月
錦織公園とその周辺地域に生息する野鳥（上村賢）	No.7	2009年3月
錦織公園におけるルートセンサス調査の一例（田淵武夫）	No.9	2011年3月
南河内地域の自然再生に挑戦：ホタル、アユ（小川力也）	No.13	2014年3月
- ・「自然環境保全活用調査」報告書に掲載された動植物
 

錦織公園西部地区	: オオタカ、メダカ	5,6号	2007,8年
東板持地区	: ホタル、ツリガネニンジン等	”	”
廿山古墳	: ササユリ、ワレモコウ等	6号	2008年3月
金剛コロニー周辺	: テイショウソウ、シライトソウ等	9号	2011年3月
棚田周辺	: アキノタムラソウ、ウツボグサ等	10号	2012年3月
彼方、佐備周辺	: ホトトギス、ウラシマソウ等	11号	2013年3月
辰池、桃花塾周辺	: ウツボグサ、モリアオガエル？等	12号	2014年3月
廿山周辺	: ツリガネニンジン、ワレモコウ等	”	”

## 参 考 資 料

- 金剛団地の変遷  
(金剛団地自治会結成 30 周年記念誌「金剛はふるさと」より)
  
- 住宅地開発による里山環境の消失の事例  
(2007 年→ 2016 年 金剛錦織台)
  
- 金胎寺山現地調査  
(H28 年 11 月 11 日)
  
- 生物多様性広報パネル  
(環境省ホームページより)

●金剛団地の変遷（金剛団地自治会結成 30 周年記念誌「金剛はふるさと」より）



造成前の金剛団地

資料提供 大阪狭山市



1967年12月＝高辺台730戸完成、第1陣480世帯入居

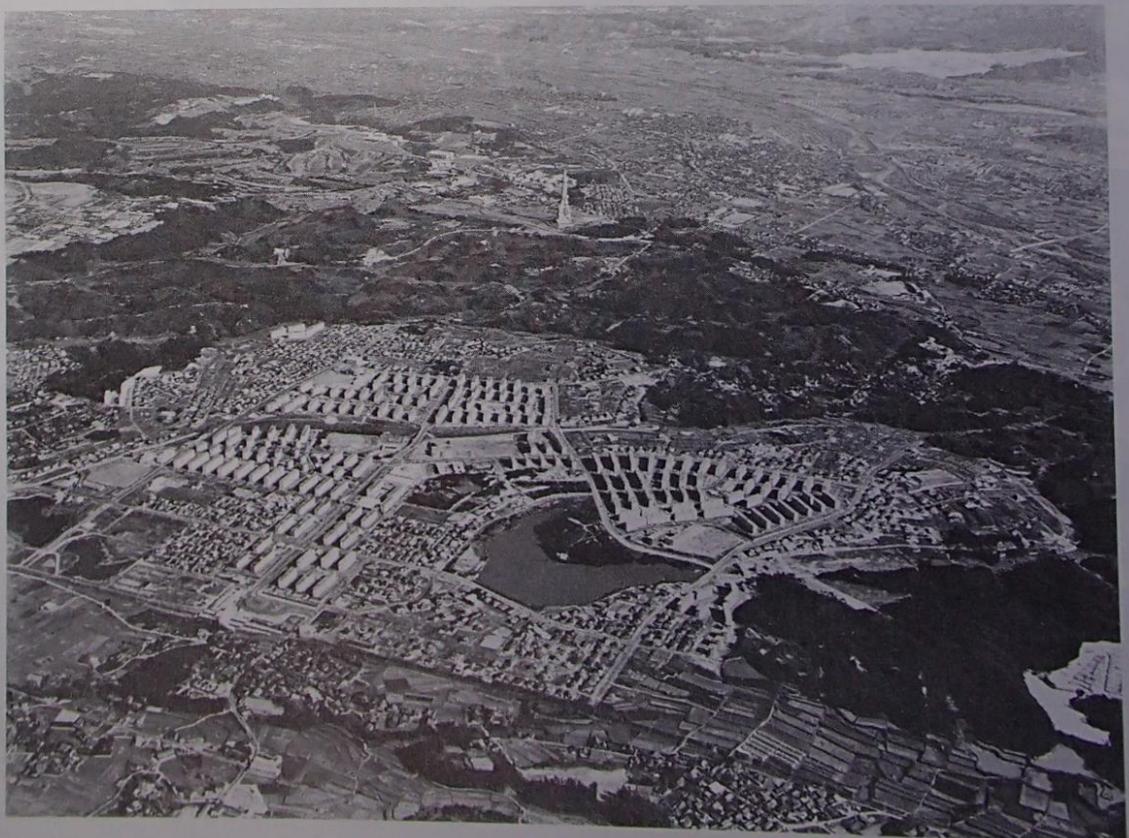


1963年3月＝造成中の金剛団地

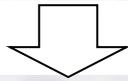
1967年当時



1970年11月=金剛団地完成時



●住宅地開発による里山環境の消失の事例（金剛錦織台）



●金胎寺山現地調査（H28年11月11日）

H21年度に調査した金胎寺山について、その後、地元住民の有志による「嬉城山クラブ」がつけられ、登山道整備や山林の手入れが行われていると聞き、クラブの方に案内を依頼して現地調査を行った。

登山道は西側山麓から中腹までは、ヒノキ林に侵入した竹林を伐採・除去して整備されていたが、数年前までは歩けない状態だったそうである。竹林帯をぬけると大径木のクヌギが生育する尾根を経て山頂に至る。山頂は周囲の高木を残して広場として整備され、360度の展望がひらけている。道沿いにはボランティアの手作りによる道標やベンチ、簡易トイレ、山頂看板などが設置されている。また、山頂東側の急斜面には城山オレンヂ園につづく道も切り開かれており（通行は許可が必要）、長らく場所のわからなかった「楠公さんの井戸」も再発見したとのことである。

今後は、地元の努力によって整備された道を活用し、継続的に管理されることが望まれる。



↑ 西側山麓からの登山道入口。



↑ 道の両側 5~10mの竹を除去して整備。



← 伐採した竹は積み上げて整理されている。



↑ 竹林帯の上に残るクヌギの大径木。

← 竹ヤブが迫る山頂直下付近の道。



↑ 山頂からの展望（大阪湾、淡路島方面）



↑ 周囲の樹木を残して広場を整備した山頂



↑ H21年度調査時の山頂東側斜面



↑ 東側の急斜面を切り開いて作られた道



↑ ボランティアの手作りによる看板、ベンチ、道標、簡易トイレ

**【金胎寺山でみられた植物（木本）】**

アオキ、アカメガシワ、アケビ、アラカシ、イヌツゲ、ウツギ、エノキ、カキノキ、ガマズミ、カマツカ、キリ、クサイチゴ、クヌギ、クロバイ、コナラ、ゴンズイ、サクラsp、サネカズラ、シロダモ、スギ、タラノキ、ツタ、ナツハゼ、ナツフジ、ナナミノキ、ナワシログミ、ネズミサシ、ハゼノキ、ヒサカキ、ヒノキ、ヒメコウゾ、フジ、マダケ、ミツバアケビ、ムクノキ、ムラサキシキブ、モチツツジ、モチノキ、ヤツデ、ヤブツバキ、ヤブムラサキ

**【金胎寺山周辺（森林外の水田の畦・池の土手なども含む）で見られた開花していた植物】**

アキノノゲシ、アザミsp、アメリカイヌホウズキ、イヌタデ、イノコヅチ、ウシハコベ、オオバコ、オニタビラコ、キツネノマゴ、キンエノコロ、スマレsp、セイタカアワダチソウ、センニンソウ、チヂミザサ、ツユクサ、ノコンギク、ハナタデ、ヒメジョオン、ヒヨドリバナ、ベニバナボロギク、ホトケノザ、ミズヒキ、ミゾソバ、ヤブタバコ、ヨモギ

● 生物多様性広報パネル（環境省ホームページより）

地球のいのち、つないでいこう  
生物多様性

## 考えてください 生物多様性

私たち人類の活動の影響によって生きものたちの絶滅のスピードは自然の速度の約1,000倍になっていると言われています。

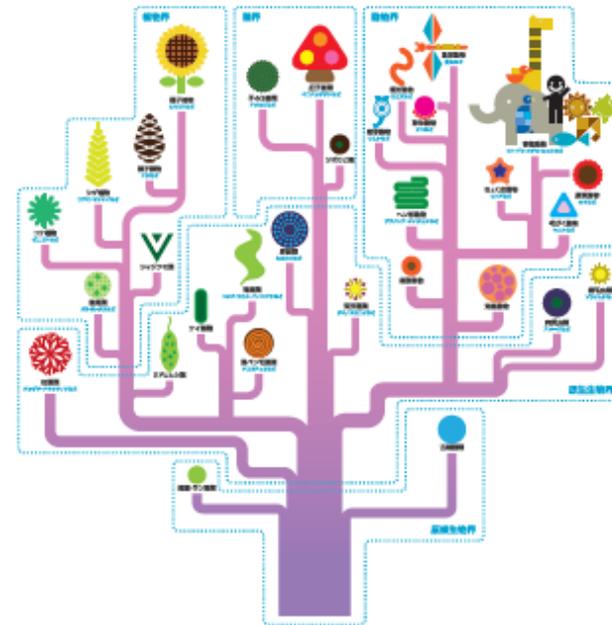
私たち人類も生きものであり、他のたくさんの生きものとつながり、支えられて生きています。生物多様性のめぐみを受けて、はじめて私たちは暮らしていくことができるのです。

環境省  
Ministry of the Environment  
Government of Japan

## 生きものの進化と生物多様性

### 種の多様性・遺伝子の多様性

地球上の生きものは、生命が誕生して以来、様々な環境に適応して進化してきました。現在、地球には3,000万種ともいわれる多様な生きものがあります。ソウのように大きなものから細菌のように小さなものまで、いろんな生きものが出て、同じ種の生きものでも個性にちがいがります。これらの生きものは長い年月をかけてお互いにつながりあい、支えあって生きているのです。



#### 種の多様性

鳥、魚、植物などいろいろな種類の生きものがあること。



#### 遺伝子の多様性

同じ種でも形や模様、気質などに多様な個性があること。例えば、アトウムシやアサリの模様はさまざま、これらはすべて遺伝子の違いによるものです。



## 日本の自然環境と生きものつながり 生態系の多様性

日本には9万種以上の生きものがあります。数千の島々からなる国土は南北約3,000kmにわたり、海岸から山岳までの高低差があり、はっきりした四季の変化、火山の噴火や台風などの自然現象、そして人間活動の影響も受けて、多様な生態系が形成され、さまざまな生きものの生活の場となっています。



### 生態系の多様性

各地に森林、草地、河川、湖沼、干潟、サンゴ礁などいろいろなタイプの自然があること。



### 生態系のつながり

それぞれの生態系もつながっています。例えば、山に降った雨は、森林に栄養分とともに蓄えられた後、地下水や川となって海へと流れ込みます。一方で陸上や海岸から発生した水蒸気が雲となって、また海となって、循環します。



## 自然のめぐみ

私たちは、暮らしに欠かせない水や食料、木材、繊維、医薬品をはじめ、様々な生物多様性のめぐみを受け取っています。生物多様性が豊かな自然は、私たちのいのちと暮らしを支えているのです。



### バイオミミクリー

自然の形態や機能を模倣したり、そこからヒントを得ることで、様々な課題の解決や、画期的な技術革新につながる場合があります。これを生きもの真似という意味から、「バイオミミクリー」と言います。



## 人間の活動による生物多様性の危機

私たち人間の活動により、世界の森林が2000年から2010年の間に、平均で毎年520万ヘクタール(九州と四国を足した面積程度)消失しています。またサンゴ礁は19%が既に失われ、さらに今後10年から20年の間に15%が失われる可能性があります。この結果、私たちは、生きものたちの絶滅スピードを1,000倍に加速させています。



### 人間活動の縮小による危機

長年の農林業などの人間活動を経て形成された里山は、希少な種を含め、さまざまな生きものすみかとなっています。ところが人口減少や高齢化、農業や生活のスタイルの変化により、人間活動が縮小し、里山周辺の生態系が変化して、生きものが絶滅の危機に瀕しています。



## 自然と共生する世界の実現に向けて

地球規模で生物多様性の損失と劣化が進み、取り返しのつかない事態を招くおそれがあるとの危機感の中、2010年に愛知県名古屋市で生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が開かれ、2011年以降の世界目標である愛知目標が採択されました。私たちの将来の世代のためにも、生物多様性を守り、持続的に利用していく責任があります。



### 2011-2020 国連生物多様性の10年

2011年から2020年までの10年間は日本が提案し、国連が定めた「国連生物多様性の10年」です。世界的に生物多様性の損失に歯止めがかからない状況を通り、愛知目標の達成に向けて、国際社会のあらゆるセクターが連携して生物多様性の問題に重点的に取り組む期間です。



### 国連生物多様性の10年日本委員会

国連生物多様性の10年を受け、2011年9月に、経済界、市民団体、自治体、専門家などの多様なセクターが参加して、「国連生物多様性の10年日本委員会」が設立されました。生物多様性の主流化を目指し、様々な取組を進めていきます。



---

調査・提案  
報告書まとめ

「富田林の自然を守る市民運動協議会」  
「特定非営利活動法人 里山倶楽部」

---